

地名探求の楽しみ

私は以前から自分が住む相模湖町各地区の地名の起源について興味を感じてきました。土地の名前はどのようにしてつけられたのか、また、どんないわれや言い伝えが残っているのかを知りたいと思ってきました。地名についての知識が深まれば、自分の故郷への愛着もいっそう深まるのではないかと、そんな思いを持ち続けています。

十年ほど前、私が住む相模湖町寸沢嵐の道志地区と山梨県道志村が同じ「道志」という地名であることを不思議に思い、何か因縁のようなものがあるのかどうかを知りたくくなりました。そして、道志村の古老にお話を伺うなどした結果、二つの土地には強い縁(えにし)があることがわかりました。それは大体次のような言い伝えです。

山梨県道志村の御堂沢という所に金箔塗りの立派な阿弥陀如来がまつられ、村の人達に大層親しまれていた。ところが、ある年の台風のため道志川を流れて下流の寸沢嵐村に漂着し、この村の世話人に拾い上げられた。その晩、世話人の夢枕に立った阿弥陀如来は「どうしても道志村に帰りたい」と訴えた。しかし、この阿弥陀如来をすっかり気に入った世話人は、自分の在所を阿弥陀様がまつられていた場所と同じ「道志」という地名に変え、何とか阿弥陀如様に安んじてもらおうとした。その後、阿弥陀如来は寸沢嵐の石老山顕鏡寺に安置されて現在に至っている。

地名の起源についての資料は沢山あると思いますが、手近にあるものでは相模湖町50周年記念広報特集号に、近世以前の相模湖町について「平安時代のころは、『奥三保』『桂の里』あるいは『日向郷』『日陰郷』とも呼ばれていました。四方を山に囲まれ、谷深く水豊かなこの地は、落人の陰家として適していたのか、与瀬(八雲)・小原(大原)・千木良(千本松原)・嵐山等のように都に関連のある地名が多くつけられています」と古い昔を感じさせる記述があります。相模湖町が時代の大きな流れと決して無縁ではないことを示していると思います。

また、平成2年4月から平成11年3月まで「県のたより」の津久井版に掲載されていた「つくいの地名」は、私が毎回楽しみにしております。郷土史家の高城治平氏(当時・津久井町文化財保護委員長)が執筆されたもので、津久井の地名の由来を一般の人にもわかりやすく説明し、地域の歴史にも触れている貴重な労作です。私は全107項目を大変興味深く読み、目からうろこが落ちる思いを何度も味わいました。相模湖町内の地名で直接のテーマになっているのは11項目で、このうち、土地の人でないとい読みにくい寸沢嵐という地名について次のように説明されています。

寸沢嵐(すわらし) 天正十八年(1590)小田原の北条氏が豊臣秀吉に降伏した後、津久井全域は徳川領となった。若柳村の一部七百石分は、貴志弥兵衛正吉という人が預かっていたが、元和=げんな=五年(1619)にこの地を若柳村から分離して、新しい村にすることになった。地図上では寸嵐と記録されており、これが元の名となって、近くにある丹保沢=たんぼさわ=の「沢」という字が加えられて、寸沢嵐と名付けられたものと思われる。この名は読みにくく、諸書でも「スワラシ」や「スアラシ」と振り仮名されているが、「スアラシ」と呼んでは、沢の意味がなくなってしまう。本来、「スワ」という発音は、湿地や谷又は諏訪信仰を意味しており、「アラシ」という言葉は、田畑を荒らしておくというより休耕地や川の斜面の上から材木をこかし落とす所を意味するといわれる。寸沢嵐については今後の研究課題にしたい。

このコラムを冊子にまとめた「つくい 訪ね歩記」(神奈川県津久井行政センター刊)の「あとがき」の中で、高城氏は「地名には、その地の数々の歴史が秘められており、地名を探ることは歴史を探求することでもある。そのように人々の数多くの歴史をつめこんだ『地名』というものを私はこれからも大切にしていきたいと思っている」と記されています。

まことにその通りではないでしょうか。私も、身近な地域の地名にこめられた由緒や歴史上の出来事、言い伝えなどを自分の力の及ぶ範囲で調べ、一つでも二つでも後世に伝えていければと考えています。